

令和2年度 課程博士学位請求論文要旨

否定使役動詞の補文パターンに
関する史的研究

立正大学大学院
文学研究科英米文学専攻

遠峯伸一郎

動詞が取る補文の統語的形式が意味によって規定されうことは、これまでの研究の中で広く受け入れられているところである。例えば、現代英語（以下 PE）の、“*Remember to post the letter when you arrive at the airport.*”と“*I clearly remember posting the letter.*”では、前者は補文が仮想的な事象を表して to 不定詞が使われ、後者は補文が具現した事象を表して動名詞が使われる、と説明される。仮想的な事象を表す補文は、例えば *decide* のような仮想的な事象を内項に取る動詞と適合する。

PEに見られる補文パターンと意味の密接な関係は、英語の史的变化でも観察される。上に挙げた動詞 *remember* は、近代英語（以下 ModE）まで仮想的な事象を表す補文と具現した事象を表す補文のいずれにおいても to 不定詞が使われた。そして ModE で補文として確立し始めた動名詞が具現した事象を表す場合に使われようになっていった。

PE を共時的に観察しても、あるいは、英語史を観察しても、補文パターンと意味は緊密に結び付いていることが分かる。本論文では、否定使役動詞（*negative causative verb*, 以下 NCV）を取り上げて、先行研究よりも広範囲の動詞を対象にして資料を収集し、先行研究が明らかにしていない事実を提示する。そして、それらの事実を意味の観点から説明することを目標とする。

Rudanko (2002) や Iyeiri (2010) などの NCV を取り上げた先行研究は、*dissuade, forbid, hinder, prevent, prohibit* に限定されており、また、調査する時代が動詞によってばらつきがある。そこで本論文では、Rudanko と Iyeiri が対象とした動詞だけでなく、Dixon (2005)、遠峯 (1996, 2010) などを参考に下記の動詞を選び、古英語（以下 OE）から ModE までの例を収集した。

(1) *bar, debar, deter, discourage, dissuade, excuse, forbid, hinder, inhibit, keep, prevent, prohibit, restrain, save, withdraw, withhold*

(2) *lettan, forwyrnan, geweman, bewerian, gefreolsian, ætbredan, beorgan, generian, gefriþian, forbeodan, belean, lean*

(1) は PE に見られる動詞であり、(2) は PE までに廃語となった OE に由来する動詞である。(2) に挙げた動詞のうち、*lettan* (ME *letten*; ModE *let*) を取り上げた研究はこれまでのところほとんどない。また、先行研究では OE は限定的に調査されるのみであることを付記する。

先行研究は、定形節補文、「NP+to 不定詞」補文、「NP+from+動名詞」補文を調査対象としている。本研究はこれらに加えて、二重目的語構文 (*double object*

construction, 以下, DOC) と「NP+from+NP」補部なども調査した。二重目的語構文は forbid に見られる。「禁止」は否定使役と類似の概念であり, 意味が補文パターンに影響を与えることを考えると, 類似の概念の動詞が持つ補文パターンを調べる必要性があることが分かる。「NP+from+NP」補部は「NP+from+動名詞」補文に先駆するパターンと考えられる (De Smet (2013))。以上が本論文の研究の背景である。これを第 1 章で詳説する。

第 2 章は 6 節から構成され, 本論文に係る先行研究を概観する。まず, 2.1 では, 英語史で一般的に見られる, 定形節補文から「NP+to 不定詞」補文への推移を使役動詞 (causative verb, 以下 CV), および CV と意味的に類似する動詞で観察する。2.2 では, CV の一種である NCV で「NP+to 不定詞」補文から「NP+from+動名詞」補文への推移があったことを観察する。そして, 借用語と本来語の振る舞いの違いを見る。借用語 prevent, prohibit において「NP+to 不定詞」補文から「NP+from+動名詞」補文への推移は急速であり, より古い形式 (前者) が速やかに資料から消失する。これに対して, NCV としての性質を後期 ME から持つ本来語 hinder は本来語と借用語の推移の特徴を合わせ持つ。補文パターンの推移は速やかであるものの古い形式が遅くまで残るのである (Iyeiri (2010))。2.3 は, avoid など補文に否定の含意がある二項動詞を取り上げた先行研究を見る。これらの動詞で NCV と同様に本来語と借用語の振る舞いの違いがあることを見る。2.4 では, 新たな形式が生じる際の特徴や, 補文パターンの競合で見られる特徴を概略する。新奇な形式が表面化するのを避けようとする傾向や, 発達の初期にあって不安定な形式を支える方策などを紹介する。2.5 は, CV などで補文の不定詞に否定辞が付くことを好まない傾向があることを指摘した Horn (1978) など, 補文パターンと意味の関係を共時的・通時的に見た諸研究を扱う。2.6 は第 2 章のまとめである。

第 3 章は 4 つの節から構成される。3.1 では NCV の資料を時代区分毎に整理する。3.2 は, 3.1 で挙げた資料を観察し, NCV の DOC に見られる歴史的変化, 借用語に見られる意味的特異性, 含意性 (Karttunen (1971)) の発達と意味の抽象化を明らかにする。併せて 3 つの仮説を提示する。それらは, 「NP+to 不定詞」補文の有無を決める要因についての仮説, 定形節補文から「NP+to 不定詞」補文が発達する際に定形節補文の否定辞がどのように処理されたのかについての仮説, そして NCV が avoid などの二項動詞と, どのように関係性を持ちうるかについての仮説である。3.3 では, 特に hinder を取り上げて, 独自のコーパス調査を行う。そして, ModE で一度発達したもののすぐに廃れた

「NP+to 不定詞」補文についての新たな経験的事実を明らかにする。そして、3.2 で提示した、定形節補文から「NP+to 不定詞」補文が発達する際に補文の否定がどのように処理されるかについての仮説を検証する。

第4章は3つの節から構成され、「保護」の動詞 **keep** における「NP+from+動名詞」補文の発達に係る変化を見る。「NP+from+動名詞」補文は「NP+from+NP」補部から、NP と動名詞が分布を共有することによる類推で発生したと考えられるが (cf. De Smet (2013)), **from** 句の目的語が NP から動名詞へ推移することでどのような意味的变化が生じたか考察する。4.1 では ME と ModE の資料を観察する。資料は *OED* の全文検索で得た。4.2 は 4.1 の資料を検討し、上記の推移に伴って見られる意味的变化を明らかにする。4.3 は本章のまとめである。

第5章は、借用語動詞 **persuade** などの補文パターンを取り上げ、借用元言語における性質と比較しながら、英語でどのような意味的・統語的变化を見せたのかを探る。

Duffley (2018) は PE **persuade** の意味的性質に借用元言語 (ラテン語) に由来するものがあると述べている。このことから、**persuade** において意味が通時的に変化していない可能性が窺われる。しかし同時に、ModE の **persuade** は PE で不可能な補文パターンが見られる。なぜそれが見られるのかを説明するのが本章の主なテーマである。以上が 5.1 の内容である。5.2 でラテン語と ModE の資料を提示する。ModE の資料は *OED* の全文検索で得た。5.3 は、5.2 の資料を分析し、ModE の **persuade** は、その補文パターンから判断して、PE **say, tell** のような情報伝達の動詞としての性質を持ったと主張する。加えて、**persuade** の対義語で NCV の一つである **dissuade** も情報伝達の動詞としての用法が ModE で存在した、と主張する。

第6章は本論文を総括し今後の課題を述べる。本論文は、主に、NCV に見られる補文推移について、先行研究で明らかにされていなかった事実を発掘しただけでなく、理論的な貢献も行った。先行研究では、借用語や、新たに NCV としての特質を獲得した動詞は、推移が速く徹底していると指摘されているが、本論は、借用語の意味的特異性など、これ以外の性質を明らかにした。なお、借用語の意味的特異性は NCV だけでなく、第5章にあるとおり、弱い使役の意味を表す **persuade** でも見られた。また、NCV に見る補文変化に、「妨害」などの意味の捨象が伴うことも本論は明らかにしている。NCV の補文が、がんらい目的を表す節であった可能性があることから考えると、目的を表す節が含意性を獲得することで使役動詞補文として発達する類型 (cf. Song (1996)) が英語史で見

られたのかもしれない。含意性の発達は NCV だけでなく **persuade** の補文でも起きており、一般性のある現象である。本論文で残された課題は多く挙げられるが、そのうちの 1 つとして、NCV の「NP+動名詞」補文が挙げられる。この補文は「NP+from+動名詞」補文から **from** が脱落することで生じたとされている。意味的・統語的性質で未解明の部分が残されており、今後の研究が待たれる。